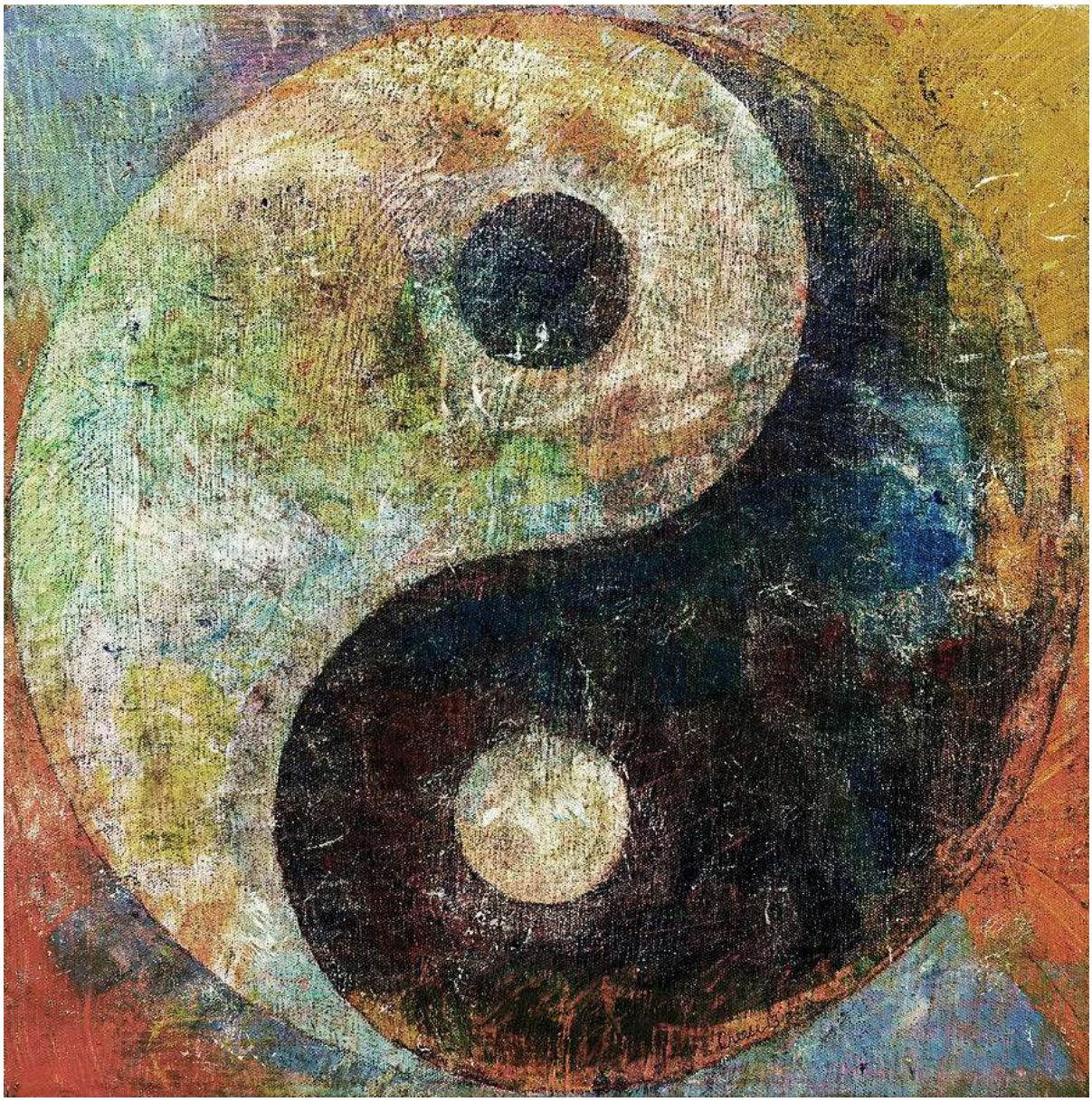
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 70

Website:「発達理論の学び舎」



© YOHEI KATO 2018

目次

1381. 人生の節目と六年前の論文

1382. 自己の不動点と日記文学と随筆について

1383. 芸術家として生きる道

1384. 幸福感の漂うフローニンゲンの中心街から

1385.「日記的随筆」「随筆的日記」の確立に向けて

1386.「色即是空空即是色」を暗示する夢

1387. 変化と知識の網の目について

1388. 発達の天窓と新たな始まり

1389. 道徳教育と霊性教育

1390. 示唆に富む夢

1391. 母国語と父国語の真なる出会い

1392. おぉ、そこには偏西風

1393. キルケゴールの眠る地へ

1394. 集合意識に浮かぶ船

1395. フォボスとタナトス、言葉と発達

1396. 公案的笑い

1397. 欧米生活の真の始まりと人工知能について

1398. 哀愁と希望

1399. 年間の能力成長率

1400. 能力測定の現状と今後

© YOHEI KATO 2018

1381. 人生の節目と六年前の論文

人生の節目節目に読み返す本。そんな書籍が誰しも一冊はあるかもしれない。私にとって、そうした一冊の書籍は、今から数年前にお亡くなりになられた松永太郎氏が翻訳した『存在することのシンプルな感覚』である。この書籍の原著は、米国の思想家ケン・ウィルバーの書籍“The Simple Feeling of Being: Embracing Your True Nature (2004)”である。私はどちらの書籍も持っているのだが、松永氏の名訳もあってか、こちらの翻訳書を人生の節目節目に読み返すことがある。

昨年は確か、日本を離れる前に最初から最後まで読み返したように記憶している。数日前に、私は何気なく本書を書斎の本棚から取り出した。もしかすると、今は人生のまた新しい節目の時なのかもしれない。人生の節目が、私の手を本書に伸ばしたのだ。

本書の中にある様々な書き込みを通り過ぎ、書籍の至る所に記されている読んだ日付を通り過ぎ、一つの大きな世界の中に安らいでいくような感覚があった。本書を読めば読むほどに、新たな気づきが得られるのは確かだ。しかし、それは全くもって重要なことではない。それ以上に重要なのは、何かに気づいている自己そのものに気づくということ。より究極的には、気づくものと気づかれるものが合一する状態が、自らの存在に他ならないということが直接的に体験されることだ。

早朝から大空を覆っていた薄い雲が消え去り、夕方のフローニンゲンの空に晴れ間が見える。昨年の今日、私はあの空のどこかにいたのだろう。今、私はその空を見ている。しかし、それがどこかおかしな表現であることにはたと気づかされた。

去年の今頃、私はあの空のどこかにいたのではなく、あの空に他ならなかったのだ。また、今、私は空を見ているのではなく、この空が自分であるということにふと気づかされたのだ。きっとこの感覚は伝わると思う。なぜなら、それは私たちが存在することの本質だからだ。

窓の外をぼんやりと眺める私と眺められる外側の景色が完全に合一する中で、六年前のとても具体的な記憶について思い出した。そういえば、私は日本語で出版物を世に送り出す前に、英語で出版物を世に送り出していた。今から六年前、初めて米国に渡って生活を始めた時、大学院の最初の学期に執筆した論文をあるジャーナルに送った。そのジャーナルはまだできて間もなかったためもあるだろう、多くの修正を要求されたが、無事にそのジャーナルに論文が採択され、それは一冊

の書籍の中の一章となった。その論文は、日米の企業社会の文化と制度をインテグラル理論の枠組みを用いて比較したものであり、今の探究関心と随分異なる。また、お世辞にもその論文の質は高いものだとは言えず、よく書籍に掲載してもらえたなと今になっても思う。

現在の関心テーマとかけ離れており、さらにはその質についても納得していないため、自分のCVの出版履歴にその論文について記載をしていない。当時の自分はあまりに若く、論文を執筆するということの意味も意義もわかっておらず、また学術の世界に留まることを考えていなかったこともあり、少しばかり浅薄な形で論文を提出することになったのだと思う。

書籍と同様に、論文も自分が生みの親であるという明確な意思を持ち、責任を持ってこの世に送り出していかなければならない。子を産み、子を育てるのと全く同じ責任感を持って、これからの一つ一つの仕事を進めたいと思う。そのような思いにさせてくれたのが、六年前に執筆したあの論文だった。2017/8/1(火)

No.26: Surrealistic Writing

Surrealistic writing is my unconscious daily practice. Instead of painting, writing can be a modality to represent surrealistic phenomena within us. Capturing and describing subjective transcendental phenomena are the door to the absolute reality. Monday, 8/7/2017

1382. 自己の不動点と日記文学と随筆について

昨年の今日、私はオランダのフローニンゲンの地に着いた。まさに去年の今日から新しい生活が始まった。フローニンゲンでの生活の初日に起こった様々なことを今となっては懐かしく思い出すことができる。あれから一年が経ち、自分の中で随分変わったと思われることがある一方で、変わらずにあり続けているものがあることに気づく。

興味深いのは、変わっていくものは絶えず深まっていくものと関係しており、自己の深まりとともに、自分の中の不動点が徐々に姿を現してくるかのようなのだ。自己の不動点。それはまさに、自己を究極的に深めていった末に残る存在の香りのようなものである。それこそが自己の究極的な個性と呼べるものなのではないだろうか。個性というのはある意味で所与でありながら、別の意味において所与ではない。

つまり、確かに個性というのは生まれつきその人に備わった唯一の特性なのだが、それが完全にこの世界に顕現するためには自己の深まりが必要なのである。一年前の今日から現在の今日にかけて、私はどれだけ自己を深めることができたのだろうか。目には見えない微細なものであったとしても、わずかばかり自己が深まったと言うことができれば幸いだ。それが幸いなのは、自己の深まりが究極的な自己の唯一性を発見することにつながるからであり、そうした真の個性を通じて生きることは、自分の生に充実感と幸福感をもたらすからである。

今の私がそれらの大切な感情を抱きながら生活を営むことができているのを見るにつけ、私は少しばかり自己の唯一性を見出しつつあると言えるだろうし、であるがゆえに自己が少しばかり深まったと言えるのではないかと考える。

早朝のフローニンゲンの空は、優しい青色と白色で塗られている。自分の心が静謐な感じがする。心身ともに申し分のない状態である。

今日は午前中に、再読のものも含めて12本ほどの論文を読みたい。そうすれば、いよいよ書斎の机の上から論文の山が消える。消えた論文の山は、内側の体系の土台となり、将来に生まれ出てくる山の一部になるだろう。明日以降からは、20冊ほどの未読の専門書に取り掛かりたい。そこからは既に一読済みの論文と専門書を再読することに時間を充てたい。論文に関しては、ポール・ヴァン・ギアートのものをとりわけ注意深く読み込んでいく。

昨夜、ふとしたきっかけに「日記文学」というキーワードであれこれ調べ物をしていた。すると、日記文学というのは日本古来から伝わるものであり、特に平安時代以降から栄えた芸術分野であることがわかった。例えば、紀貫之の『土佐日記』を筆頭に、紫式部の『紫式部日記』や和泉式部の『和泉式部日記』などが挙げられる。純粋な日記形式ではなく、随筆形式のものも含めれば、清少納言の『枕草子』も平安時代に書かれたものだ。

当時の貴族達が私的な事柄を日記として書き留めることに端を発して、女性の執筆家の貢献によって発展を遂げたのが日記文学である。上記に取り上げたもの以外にも、『蜻蛉日記』や『更級日記』も重要な作品である。今でもこれらの作品が読み継がれ、それが今日の文学に与える影響は多大

© YOHEI KATO 2018

なものであるがゆえに、日記文学というのも一つの芸術領域なのだとふと思う。「日記も芸術になり得る」ということは、今の私にとってとても大きな意味を持つ気づきのように思われた。

また、上記でも簡単に触れたが、随筆というのも一つの芸術領域なのではないだろうか、という思いが湧き上がる。清少納言の『枕草子』をはじめとして、鴨長明の『方丈記』や吉田兼好の『徒然草』も類稀な随筆作品だろう。さらに時代を下ると、本居宣長の『玉勝間』や新井白石の『折たく柴の記』は随筆作品だということに気づかされた。確かに私は、学術論文を執筆することを仕事にしたいと強く思っているのだが、日々の生活の中で、日記や随筆のような文章を書くことも今後継続させていきたいと強く思っていた。

そうした思いを持っている折に、日記や随筆が芸術にまで高められるという可能性を見出したことは、非常に大きな意味を持つことであった。一日一日を生きる充実感と幸福感がまた深いものになっていくような気がしている。日記や随筆が芸術にまで昇華されるのであれば、一人の人間が真に生きることは、もはや芸術だと言えるのかもしれない。2017/8/2(水)

No.27: To Northern Europe

I packed a bag for travel to Northern Europe. This trip will be a catalyst to cultivate my inner world. Danish culture and Norwegian nature will nurture my thoughts and feelings, which can lead to the maturation of my existence. However, I have to notice that the spirit is beyond the matter of maturation. I expect what I will encounter in Denmark and Norway. Monday, 8/7/2017

1383. 芸術家として生きる道

予報では晴天だったのだが、一向に晴れ間が見えず、薄い雲が空を覆っている。太陽の光を浴びながらランニングに出かけたいと思っていたのが、この様子では曇り空の下を走ることになるだろう。そうだとしても、身体を動かすことは心身の優れた調整であることに変わりはないため、昼食前にランニングに出かけたいと思う。

朝一番に、日記と随筆について少しばかり考えていた。その時私は、日記も随筆も芸術の域にまで高めることが可能であることを書き留めていた。それでは、芸術の基準は何だろうか？という問いが

浮かび上がった。何をもってして、日記や随筆が芸術と呼べるまでになるのだろうか。それが気になってしょうがなかった。

様々な基準があるとは思うが、一つ外してはならないものとして、書かれるものの中にその人の思想が込められているかどうかは極めて重要な基準だろう。この基準を用いれば、既存の芸術領域の中で生み出されるものが常に芸術作品であるとは言えないということも見えて来る。つまり、その人の中に思想が形成されていない場合、それがいかに確立した芸術領域の中で何かしらの作品を残そうとも、それは真の芸術だと言えないのではないかということだ。思想というものもこれまた掴みづらいものなのだが、それは究極的な一点としての個の自覚から紡ぎ出される思考や感覚の総体だと捉えている。

真の芸術活動に従事するためには、自分の中に思想がなければならず、思想を育むためには、個の自覚に辿り着かなければならないことがおぼろげながら見えて来る。それでは、そこから日記や随筆が一つの芸術になるための他の条件についても考えていた。辞書を調べてみると、芸術とは「特定の材料・様式などによって美を追求・表現しようとする人間の活動」であると定義されている。この定義を見ると、やはり「美」の追求と表現が芸術には欠かせないものなのだとわかる。

一方で、材料や様式に関しては曖昧な形で定義されていることがわかり、この定義に従えば、確かに日記や随筆も芸術になりうるということが見えて来る。特定の材料に関しては、その個人の日々の体験とそれを通じて生まれる思考や感覚、様式に関しては日記形式もしくは随筆形式を当てることができる。

「随筆的日記」、もしくは「日記的随筆」を自分の中の一つの大切な表現様式としながら文章を書き続けたいという思いが湧き上がる。以前、ヘンリー・デイヴィッド・ソローの生活について触れたことがあったように思う。ソローもまた類まれな随筆家であった。

また、ソローの師でもあったラルフ・ワルド・エマーソンも、哲学者かつ詩人でありながら、随筆家でもあった。夏季休暇の後半にエマーソンの“The Essential Writings of Ralph Waldo Emerson (2000)”を読もうと思っていたのは何かの運命か。この運命に従って、私は本書を北欧旅行の友にしたいと思う。その一冊だけを北欧に持っていくことを誓う。その他の書籍は持っていかない。

また、今度日本に一時帰国する際には、ぜひとも日本を代表する日記作品である『土佐日記』『紫式部日記』『和泉式部日記』、そして永井荷風の『断腸亭日乗』や、日本を代表する随筆作品である『枕草子』『方丈記』『徒然草』『玉勝間』『折たく柴の記』を欧州に持ち帰りたいと思う。

学者として生きるのみならず、芸術家として生きるなどという大それたことは言いたくないが、自己を深めることが芸術に不可欠であり、深められた自己を通してなされる表現活動が芸術に昇華されていくのであれば、そのような生き方は芸術家として生きることに近しいものがあるだろう。今この瞬間に、そのような気づきを得ることができてとても嬉しく思う。今日からの一日がまた違った様相を帯びてくるに違いないという確信と喜びがある。2017/8/2(水)

No.28: On the Way to Northern Europe

I'm on a bus to Bremen. I left Groningen at 7:15 in the morning. I'm reading Emerson's writings that resonate with my spirit. His words and sentences stimulate and vitalize my spirit. Emerson is still alive in his writings. His writings are the epitome of his immortal soul, which assures me that human souls cannot decay forever even if human bodies have the fate to disappear. Emerson's writings are a great itinerary for my trip to Northern Europe. Tuesday, 8/8/2017

1384. 幸福感の漂うフローニンゲンの中心街から

先日、歯の定期診断に行き、今日は歯のクリーニングを行いに歯医者に立ち寄った。予定時間ちょうどに着いたのが、先客がまだ待合室におり、自分の番になるまでしばらく時間があるようだった。そのため、持参した"New Diresctions for Child Development: Cognitive Development (1981)"を読み進めることにした。本書は、カート・フィッシャーが編集者を務め、本書には彼の論文も二本ほど収められている。

今からおよそ40年前に書かれた書籍なのだが、どの論文も非常に価値ある洞察を含んでいる。科学的な真理というのは時の重みに耐え、それが色褪せることはないと思った。もちろん、現在の研究成果に照らし合わせてみれば、本書で記載されていることの全てが正しいわけではないのだが、それでも本書に価値があると感じるのは、科学的な真理の持つ力だろう。

待合室で待っている間の少しの時間を使って本書を読み進めてみるだけでも、随分と気づきがもたらされた。最初の章はフィッシャーの論文が掲載されており、2000年以降の論文にはあまり登場しないような概念がいくつも用いられており、出版年の古さとは対照的に、非常に新鮮な気持ちになった。その中のいくつかの概念は、今後自分が発達研究に携わる時に活用できるようなものも含まれており、それらについてはまた別の機会に文章を書き留めることになるだろう。予定時刻よりも10分ほど遅れて私の番がやってきた。

本題のクリーニングに入る前に、担当の歯科医から、小さなスティックを用いて歯茎を強化する方法についてレクチャーを受けた。実は、半年前にクリーニングをしてもらった時にもその方法を教えてもらっていたのだが、毎晩スティックを用いて一本一本の歯茎を強化するのが思った以上に面倒であり、それが習慣になることはなかった。歯科医は毎晩それを行うことを推奨していたのだが、私の歯茎を見るとすぐに、私がそれを怠っていたことを一瞬で見抜いたようだった。実際にそれを怠けていたがゆえに、スティックの正しい使い方を忘れていた。

歯科医にもう一度スティックの使い方を教えてもらい、今日から正しいやり方で、毎晩歯茎を鍛錬しようと思う。少しばかり調べてみると、歯磨き以上に歯茎をケアすることが重要らしいため、なおさら正しいやり方で、歯茎の鍛錬を習慣にする必要があると思った。

歯科医を後にし、フローニンゲン大学のメインキャンパスがある通りを歩いていた。すると、大学の博物館の前でふと立ち止まった。そういえばこの博物館にはまだ一度も足を運んだことがないと思ったのだ。今の時期は何を取り上げているのかを確認すると、「健康な加齢の歴史」と「木造書籍の秘密」に関する資料が展示されているらしかった。前者の主題は発達研究と密接に関わっており、後者の主題は書籍愛好家としての私の関心と合致しており、どちらも大変興味深い主題だった。

この展示がいつまで行われているのかを携帯にメモし、八月末あたりに足を運ぼうと思った。街の中心部を歩いていると、雰囲気が夏休みの様子を呈していることに気づく。子供連れの家族が普段よりも多く、街を流れる時間もいつもより緩やかだ。メイン通りの脇にあるいくつものカフェは、どこも人が一杯であり、陽気な太陽光の下でコーヒーやお酒を飲んでいる、幸せそうな人々の表情を見ることができる。辺りにいる人の幸福感が私に伝染し、自分も同じような幸福感に包まれていた。人が感じる幸福感の良さはそこにある。

© YOHEI KATO 2018

メイン通りのちょうど真ん中辺りに、広大な空間があり、そこは曜日によって市場に変わる。今日は市場がやっておらず、ただ広い空間が広がっているだけである。何羽かのハトが、道端に落ちているパンをつついている。市場が催される石畳の道の上をパトカーがゆったりと通り過ぎる時、危うくそれらのハトをひきそうになった。幸いにもハトは無事であり、ホッとした気持ちになった。

先日に少しばかり回復に向かいつつあった手荒れがどうにも完治しないので、ハンドクリームを買いに街の中心部の薬局に向かった。そこの商品の多くはオランダ語で書かれているため、なかなか解読するのが難しかったが、ちょうど来週からの北欧旅行にも持っているけるような小型のハンドクリームを購入した。これで今日の用事は全て済んだと思ったが、チーズ屋にも立ち寄りたいと思っていたことを思い出した。その薬局からチーズ屋まではそれほど遠くなく、夏季休暇の雰囲気を再度味わいながら来た道を引き返していた。

チーズ屋でいつものナッツ類と一年発酵もののオーガニックチーズを購入した。店主としばらく雑談をし、お互いの夏季休暇の過ごし方について話をしていた。先日、かかりつけの美容師のロダニムと同じように、このチーズ屋の店主も九月に休みを取り、オランダ北部の島に旅行に出かけるそうだ。オランダ人にとって、それらの島はきっと慣れ親しんだ休息地なのだろう。

私もいつかそれらのどこかの島に足を運び、オランダ人が本土を離れてそうした場所で時間を過ごすことの意義を身をもって体験してみたいと思う。いつもの商品を購入すると、どうやらポイントが溜まっていたようであり、交換リストを眺めると、一つ気になるものがあった。基本的に私は普段一切お酒を飲まないのだが、そのポイント交換リストにある赤ワインを飲んでみようと思った。店主曰く、スペイン産のものであり、購入したチーズによく合うとのことである。

書籍の出版から一ヶ月半が過ぎ、一年目のプログラムが終了してから一ヶ月が過ぎたが、それら両方のお祝いとして、今日は少しばかりこの赤ワインを口にしたいと思う。2017/8/2（水）

No.29: Writing and Reading a Poem

Both writing and reading a poem in an embodying way is quite difficult. A poetic language requires us a special sense to comprehend a poetic world. I wish I could see a beautiful world disclosed by a poem and listen to a wonderful song played by a poem.

To dive into such a poetic dimension, I need to cultivate my sense and feeling. Deepening my inner world could be the best way to write and read a poem in a more embodying way.

Tuesday, 8/8/2017

1385.「日記的随筆」「随筆的日記」の確立に向けて

早朝はあいにくの曇り空だったが、自分の思いが届いたのか、昼食前から晴れ間が広がった。数日前に計画していた通りに、昼食前にランニングに出かけた。

欧州に渡って以降、曜日の感覚というものがいよいよ無くなり、今日が平日の水曜日であることにはたと気づかされる。八月に入っても依然として涼しい気候が続いており、もしかすると昨年の夏よりも涼しいのかもしれないと思っている。

ランニング中にふと、誠実に仕事を進めていくことが何より大切かを改めて思った。それは自分の仕事に対する向き合い方でもあり、協働者やクライアントに対する姿勢でもある。何か貢献をしようとするよりも真っ先に求められるのは、自己や他者に対する誠実性だと常々思う。日々仕事をしていて思うのは、自分が何か大きな貢献を組織や社会に果たせるとは到底思えず、逆に組織や社会も私に大きなことなど期待していないことがわかる。大事なことは、誠実さを絶対条件とした関係性の構築であり、関与なのだと思う。

お決まりのノーダープラントソン公園の中を走っている途中で、ふと右に顔を振ると、学期中に足を運んでいた社会科学キャンパスにつながる道を見つけた。普段、社会科学キャンパスに行く時は、近道がてら公園を大胆に横切ることにしているため、今自分が走っている道を通ることはない。しかし、よくよく考えてみると、今自分が通って来た道は、公園内にある深々とした森林の中を通ることができ、そこで得られる自然の癒しの力と活力を考えた場合、時間にゆとりをもたせてこの道を通って社会科学キャンパスに行くべきことが望ましいと思った。

自然というのはつくづく不思議だ。そして、自然と人間の関係もつくづく不思議だ。私たち人間は、どれほど自然から恩恵を受けていることだろうか。あの静寂な深い森林の中にいる時、心は自然と観想的な状態に誘われる。私たちは、人工的な建物の中にあってこのような意識状態に誘われることはないだろう。それほどまでに、自然は私たちの心身、そして魂にまで影響を与えるのだ。

燦然と輝きながらも、それでいて優しい太陽光を全身で浴びながら、私はノーダープラントソン公園を走り抜けた。そして、街の中心部に向かって走り続け、行きつけのインドネシアンレストランに足を運んだ。店が開く時間よりも数分早く到着したが、店主の奥さんが私の存在に気付き、早めにドアを開けてくれた。一番客として注文したものは、いつもと全く同じものである。店主と店主の奥さんと少しばかり雑談をし、インドネシア語について少し教えてもらった。

私は中学校時代にインドネシアを訪れる機会があり、その時に覚えた食べ物の名前しかインドネシア語を知らないため、店主の奥さんが親切に色々と新しい言葉を教えてくれた。これまで少し気が強そうな方だと思っていたのだが、どこか優しさがあるのは感じていたため、今日はそれが確信に変わった。

店を出るとき、店主の奥さんが「来週もまたレッスンね」と優しく言葉を投げかけてくれた。店主の奥さんのその言葉と店主の笑顔を見て、お礼の言葉と別れの言葉ぐらいインドネシア語で言えるようになろうと誓った。

インドネシアンレストランからの帰宅途中、早朝に考えていたテーマについて考えていた。それは、自分がこれから学者としてだけではなく、芸術家として生きることについてであった。正直なところ、これまでの自分の経歴や成してきたことなどを考えると、学者として生きることも芸術家として生きることも、どちらもこれまでの自分とはかけ離れた生き方であることは間違いない。

だが、それはこれまでの自分であって、今の自分が希求する姿ではない。やはり、今の私は学術的な探究と芸術的な探究の双方に打ち込みたいのだ。これは隠しようがなく、抑えようがない思いである。そして、究極的なところでは、学術的な創造と芸術的な創造が合致しなければならないと思う自分がいるのだ。

今朝は、学術論文のみならず、「日記的随筆」もしくは「随筆的日記」という表現活動に従事したいという自分の思いについて考えていた。早朝の考えでは、日記も随筆も芸術の次元にまで昇華することができるということであった。今の私の中では、自分の中に思想を育み、それを「日記的随筆」もしくは「随筆的日記」という形式を通じて表現することに従事したいという思いがある。それらの表

© YOHEI KATO 2018

現形式を、独立した新たな芸術分野として構築しようとするのではなく、日記文学を築き上げてきた先人と偉大な随筆家からそれらの伝統を学ぶ必要があると思った。

独りよがりな発想をするのではなく、新たな芸術分野を早急に打ち立てようとする暴挙に出るのではなく、とにかく今はこれまでの伝統を確固とした形で自分の中に取り入れたいと思う。少なくとも、伝統の道の上を自分で一度歩き、自分がなそうとしていることがそれらの伝統とどのような関係にあるのかを明確にし、そこから自分の表現形式が持つ既存の伝統にないものが何なのかを冷静に把握していく姿勢が求められるだろう。

それを行うために、日本古来の日記文学作品や随筆作品に触れていきたいと思う。また、それは日本のものだけでなく、ある意味日記文学的なマルセル・プルーストの代表作『失われた時を求めて』や、ラルフ・ワルド・エマーソンの随筆的な全集を読むのはそのためである。2017/8/2(水)

No.30: From Discontinuity to Continuity Vice Versa

I arrived at Bremen. Before getting there, I was watching railroads with my curious eyes. When I was observing distant rail blocks from a window, discontinuity suddenly showed up. On the other hand, once I saw near rail blocks, continuity appeared all of a sudden.

This reminded me of a difference and differential equation; the former is for discrete sequences, whereas the latter is for continuous sequences. More interestingly, if I tried to make my eyes follow the moving speed of the continuous rail blocks, they showed discontinuity. However, I could not capture a phenomenon between continuity and discontinuity.

It told me that the reality does not allow the in-between phenomenon. Unfortunately, I could not overcome the dualism of continuity and discontinuity. Tuesday, 8/8/2017

1386.「色即是空空即是色」を暗示する夢

早朝起床するとすぐに、季節が変わり目にあることがわかった。ここ最近、薄々とその変化の兆しに気づいていたのだが、今朝起きた時にそれが確かなものだとわかった。八月に入って間もないが、すでに秋に向かって季節が動き出している。日が沈む時間が早くなり、日が昇る時間が遅くなって

いることからもそれは一目瞭然である。その時間差は微妙なものなのだが、毎日それを観察していると歴然とした差として知覚される。太陽の光が有るのと無いのとでは、随分と感情的な変化があるものであり、昨夜も就寝前にそれをしみじみと感じていた。

今朝は、朝日が顔を覗かせる前に起床していたこともあり、昨夜の就寝時と同様の気持ちになった。太陽の光は、人間の感情面にまで届くものなのであり、それは自然がもたらす一つの大きな恵みだと思った。

起床をし、書斎の机につき、早速早朝の仕事に取り掛かる。書斎の窓から見える空はとても鬱蒼としている。濃い雲があるわけではないのだが、薄い雨雲が空全体を覆い尽くしているような朝だ。

太陽の沈む時間と昇る時間を観察し、そこに差異を見出し、それが自分の感情の差異を生み出していることについて触れたが、差異を発見し、その差異の中に潜む別の階層の差異を見つけることは非常に大切だと思う。とりわけそれが自分の内面に関わるものであれば、そうした差異の連続的発見は内面の成熟に手を差しのばす。文化人類学者のグレゴリー・ベイトソンが指摘するように、差異は見つけようとしなければ見つからないものなのだ。

昨日と今日の自分の差異に気づくことができるだろうか。自分の内側のどこにどのような差異が生じているだろうか。それがいかに微細なものであれ、量子的なものであれ、それを捉えようとしなければ、私たちの内面は成熟していかないということを最近強く実感している。だが、私たちがひとたび小さな差異に気づくと、それはまた新しい差異を生み出し、仮に私たちがその新たな差異に気づくことができれば、差異の連続的な創造と連続的な発見に参与することが可能になる。そうした参与は、絶え間ざる内面の成熟に要求される条件だ。その条件を満たすことができなければ、一人の人間の中で何かが深まっていくことなどないだろう。

空にかかった薄い雨雲の色が濃くなった。それは、これから雨が降ることを静かに告げている。昨夜は久しぶりに印象に残る夢を見た。夢の中で私は、二つの土地をまたぐ線の境目にいた。それは国境線ではなく、単純にある土地をこちらとあちらで区切っているようだった。

こちらとあちらの土地の間には、巨大なフェンスが置かれており、私は、こちらとあちらの土地の人間同士で行われるサッカーバレーの試合に参加していた。あちらの土地の人間が空高くボールを

蹴り上げ、フェンスを越えてこちらの土地に入ってくる。それをこちらの土地の人間がトラップし、他の仲間にボールをつなぎ、その人物がボールを空高く蹴り上げて再びあちらの土地に送り返した。すると、あちらの土地の人間がボールを落とし、ミスが発生した。

それを見て、こちらの土地の人間は歓喜に包まれている。その感情は一過性のものであり、再び試合に戻り、巨大なフェンス越しにボールのやり取りがそれ以降何度もなされた。自分がどれほどこの試合に関与していたのか定かではないが、ある時突然、あちらの土地の人間が馬になった。二本足で立ち、人間の言葉を発する馬だ。

こちらの土地からボールがフェンスを飛び越え、あちらの土地にいる一頭の馬がボールを受け止め、天高くボールを蹴り上げた。私は、天高く蹴り上げられたボールをただぼんやりと眺めており、それが豆粒のように小さくなっていくことを見たところで夢から覚めた。

人間が馬になり、丸い球体が天に向かって昇っていき、一つの点に回帰する夢。そのように夢の内容を要約した時、この夢が暗示しているのは、一人の人間の魂は「天」において「点」になるということかもしれないと思った。天に向かって蹴り上げられたボールのその後が非常に気になるところだが、それはきっと再び地上に降りてきただろう。ここに上昇の道と下降の道を見出すことができるだろうか。

それを見抜くことができなければ、一人の人間の成熟過程について何もわかっていないことになる。馬が蹴り上げたボールは、まさにこの顕現世界における一つの形態なのだ。しかし、その背後には一者である属性を持たない空性がある。あのボールが空（そら）に向かって行ったのは、一つの形態が空（くう）なるものであるという「色即是空」を示していたのではないだろうか。

天に到達したボールはきっと地上に舞い戻ってきただろう。それが暗示するのは、まさに下降の道なのだ。一つの点に帰したボールが再び地上に戻ってくるとき、それは空性の現れなのだ。つまりそれは、空（くう）は形態を持つという「空即是色」を示していたのではないだろうか。

人は上昇の道と下降の道のどちらかを歩もうとしがちである。私たちはそれらの両方の道を歩まなければならない。一人の人間の成熟過程には、絶えずこの両者の道があり、それらの道を歩くことによって、真に人間が成熟していくということを暗示するような夢だった。2017/8/3（木）

© YOHEI KATO 2018

No.31: Wish to See Space and Time in a More Colorful Way

I'm on a train from Hamburg to Flensburg. I mentioned a spatial dualism of continuity and discontinuity. My thought jumped into the same issue about time. Time also comprises of continuity and discontinuity. Yes, time passes minute by minute or second by second. It is so called discrete time.

On the other hand, time also has differential aspects. Again, I cannot detect an in-between dimension of time. At best, I can find a discontinuous leap between discrete and continuous time. What space and time can be explained by only two concepts──continuity and discontinuity──makes me slightly disappointed. I would like to see space and time in a more colorful way.
Tuesday, 8/8/2017

1387. 変化と知識の網の目について

早朝、イマヌエル・カントの"Critique of Pure Reason"を音読している時、一つの記述に立ち止まった。改めて考えてみると、一つの現象が変化するというのは実に不思議かつ奇妙なことのように思える。変化というのは、前の状態と異なる状態に移行することを余儀なくさせるのだが、以前と以後が持つ繋がりには変化がないのだ。人間に置き換えると、それは自己同一性と呼ばれるものであり、これが他の現象の中にも見られることをとても興味深く思った。

変化のさなかにあって変化しないものがあることに思いを巡らせていると、変化とは果たして何なのだろうかという問いとぶつかる。一つの現象は絶えず変化していながらも、その中に変化しないものが絶えず存在しているということ。全ての現象は絶えず何かしらの変化を経験していると思われるが、そうしたさなかにあっても同一性を保つ変化の核に当たるものが無性に気になる。

書斎の本棚を何気なく眺めていると、結局、一人の人間が知ることやわかることのできることなど、微々たるものでしかないことに気づかされた。自分の残りの人生で知ることやわかることのできることなど微々たるものでしかない、という歴然たる事実が私に突き刺さる。本棚の前で少しばかり茫然自失にしばらく立ちすくむ。再び自分に意識が戻った時、それでも私は自分にできることを進めてい

こうと思った。この結論は、いつもと全く同じなのだが、この結論に行き着くたびに、いつもとは違う景色が広がってくる。あるいは、これまで見えなかったものが少しだけ見えてくるような感覚になる。

変化の本質はやはりこれなのだろう。変化するものの中に変化しないものがあり、変化しないものを起点としながらも絶えず変化していくのだ。先ほどのカントの書籍に記されていた一文は、それを私に伝えるために存在していたのだと思う。

今日はこれから、書斎の机の上に積み上げられた論文の山の最後の論文を読む。それを読み終えることができれば、とりあえず机の上に積み上げられていた論文の山が消えることになる。そこからは、カート・フィッシャーが編集に携わった“New Diresctions for Child Development: Cognitive Development (1981)”を読み終えたい。本書を読み終えることができれば、マイケル・コモンズが編集に携わった“Adult Development: Volume 1 Comparisons and Applications of Developmental Models (1989)”に取り掛かりたい。

昨日、歯医者に足を運んだ時、改めてその領域固有の知識を確立することの重要性を実感していた。領域固有の知識とは、その領域に関する土地勘を育むものであり、それがなければやはり仕事にならないのだということを痛感する。自己の専門性がどの土地に根ざすものであり、その土地の性質をどれだけ深く知っているかは、自らの専門性を発揮する時のみならず、他の領域の専門家と協働する時にも重要になる。

そうした土地勘を養うに際して、知識を詰め込む形で知識体系を構築していくのではなく、ネットワーク的に知識の網の目を作り上げていくことが大切になる。言い換えると、編み目としての知識を徐々に高度な体系に仕立て上げていくことが重要になる。

私たちのシナプス構造のように、知識をネットワーク的に育んでいくのだ。決して、ぶつ切りな知識を取り入れてはならない。そのようなことをしていては、知識のネットワークの網の目が育たない。そうではなく、脳の性質を踏まえて、絶えず内省的に既存の知識と経験を新たな知識と組み合わせる中で、緩やかにネットワークを構築していく。

要点は、これまでの知識と経験と新たな知識を組み合わせることであり、しかもそれを内省を通じて行うことであり、さらにはそれをゆっくりと時間をかけて行うことだ。それらを経て、自分の内側に徐々

に複雑な網の目を持つ巨大な知識の建造物を築き上げたい、という思いがふつふつと沸き立っていた。2017/8/3(木)

No.32: Suchness and Fulness

People are living as they are. Nature is existing as it is. We have to protect and foster "suchness." Muchness is equal to fulness. It is omnipresent in any space and time.

Unless we can see both suchness and fulness anytime anywhere, it implies that we are trapped in the false reality constructed by us. Tuesday, 8/8/2017

1388. 発達の天窓と新たな始まり

自分の中で何かが終わり、また新たな何かが始まった。もし仮に、今この瞬間に自分の目を開けて、目の前の物を視覚で捉え、「それがそこにある」と確信を持って言うことができるのであれば、それと同様の確信を持って、自分の中で何かが終わり、また新たな何かが始まったと言うことができる。それは本日の午前中に起こった。水をせき止めているダムの水が満水となり、限界値を超えたがゆえに、ダムが決壊したかのようだった。

ダムの決壊を修復することはもはやできず、これまでと全く異なる質と大きさのダムを新たに作らなければならない。自分の内側で起きた先ほどの事柄を視覚的なイメージで描写するとそのようになる。

私たちが通るそれぞれの発達段階には、必ず発達の天窓がある。天窓はその段階の限界値を示す。先ほど、その天窓に頭をぶつけた。自分が既存の発達段階の臨界地点に到達したのだと知った。また一つ、これまで何とかせき止めていたものが、自発的な衝動を伴って流れ出した。これまでは、それを何とかせき止めなければならなかった。だが、もはやそれをせき止める必要は無くなったのだと知る。

今日の朝がその時だったのだ。自分の内側から外側に溢れ出ようとするものを、もはや私は押さえ込む必要は無くなった。これまで抑え続けていたもの、それは英語で日記を書くということだった。ついにその日が来てしまったのだと思った。

今日の午前中、もう自分の頭と手は英語で日記を書き留める運動を勝手に開始していた。これを抑えることなどできはしなかった。少し前から自分は知っていた。日本語だけでは表現することも探究することもできないものが、自分の内面世界に生まれつつあることに。

英語に魂を売るわけではなく、英語で魂に火をつけ、さらにそれを育んでいきたいと思う。今の私には、母国語以外の自然言語、とりわけ英語の助けが必要だった。今日から少しずつ、英語で日記を書き留めることになるだろう。それは、簡潔であればあるほど望ましい。

簡潔な文章の中に、その瞬間の自分の内側の思考と感覚をできるだけ正確に全て梱包するのだ。小さな精密時計を無数に作っていくようなイメージで英文を書く。他者が製造した大きな時計を模倣することだけは絶対に避けなければならない。自分自身で小さな精密時計を創造していくのだ。それもおびただしいほどの数を。

激しい風が外の世界に吹き渡っている。今日はとても風が強い。

昼食前にパラパラと小雨が降ったが、今はもう止んでいる。外側の世界と内側の世界を比較すると、小雨が止んだのとは対照的に、私の内側には止まないものが確かにある。一方で、流れ続ける激しい風と同様のものを、自分の内側の中にも見ることができる。今日、何かが終わり、何かが新しく始まった。それはまったく望んでいないことだったし、むしろそれは避けたいことだった。しかし、それは自分の思いとは裏腹に突然やってきた。それが発達の本質だ。

久石譲氏の音楽が高らかに書斎の中に鳴り響く。もう過去の自分には戻れないと知りながらも、気持ちはとても清々しかった。雲の隙間から差し込んだ黄金色の太陽が、自分の進むべき道を明るく照らしていた。2017/8/3(木)

No.33: Gift from Emerson

I'm reading "The Essential Writings of Ralph Waldo Emerson (2000)." This book adds a precious color and flavor to my trip to Northern Europe. I'm astonished by Emerson's words in that they remain impeccably fresh and juicy. When I was reading his first book "Nature" which was published in 1836, the book built a timeless bridge to the ever-lasting present.

As Emerson pointed out, we can embody our spirit in our language. The embodied language is immortal because our spirit is inherently beyond space and time.

I can hear the voices of both Emerson's spirit and mine whenever I read a sentence in his writings. This is a thankful gift from Emerson. Tuesday, 8/8/2017

1389. 道徳教育と霊性教育

激しい風が外の世界を行進している。その足取りはとても力強く、そして勇ましい。開いた窓から強い風が書斎の中に吹き込んでくる。あまりの風の強さに、窓が開閉を繰り返している。今日は少しばかりおかしな日だ。

早朝に論文を一本読み、ついに書斎の机から論文の山が消えた。夏季休暇もちょうど折り返し地点に到着し、ここからの後半はさらに充実したものになるだろう。それが充実したものになるかどうかは、自己規律と自分の気概にかかっているがゆえに、それが充実したものになることを確信している。

突然小雨が降り出した。書斎の窓ガラスに微粒子ほどの雨滴が付着し始めている。遠くの空を見ると、雨雲の中にぽっかりと空いた大きな穴のような晴れ間が見える。あの下は雨が降っていないのだろうか。一見するとそう思えるかもしれないが、それは早計だ。仮に晴れ間の真下にいたとしても、雨は風によって運ばれてくる。空間的な差と時間的な差によって、私たちは晴れ間の真下にあっても雨を経験することになるだろう。

現象の原因と結果にはこのような空間的な差と時間的な差が存在しうることを忘れてはならない。また、原因と結果というものも実は明確な線引きをすることができず、実は原因と思われていたものが結果であり、結果と思われていたものが原因であった、ということも起こりうる。

結局今日は、午前中にカート・フィッシャーが編集した“New Diresctions for Child Development: Cognitive Development (1981)”を読み終えたところで、その他の専門書を読むことを控えることにした。そのような意思決定をしたのは、自分の意思を超えるところからやってきた、午前中のあの出来

事に影響を受けている。あの出来事以降、少しばかり精神を落ち着かせるような過ごし方をすることにした。色々と昔の記憶が走馬灯のように蘇る。

過去の記憶が自分の内側で還流しており、自分自身が行きつ戻りつしながら何かに向かって進んでいるのがわかる。昨日購入したハンドクリームが塗られた自分の左手の香りが、大学時代の図書館の中でどこからともなく漂ってきた良い香りを思い出させた。何かの花の香りだ。

夕方からは、明後日に控えたオンラインゼミナールの第三回目のクラスの説明資料を最終版にする。二時間ほどの作業時間を見込んでおり、それが終われば再び静かに読書をしようと思う。黙想的な読書であり、決して何かを獲得しようとするような貪欲な読書ではない。先ほど突然、現代社会における道徳教育や霊性教育の欠落に対して、自分が極めて強い問題意識を持っていることがわかった。

なぜ現代社会における教育は、人間として生きるために本当に大切なことを教えようとしないのだろうか。どうして血の通わない機械的な知識を子供たちに詰め込もうとするのだろうか。現代社会におけるそうした状況を考えた時、義憤が湧き上がってきた。道徳心や霊性を教えることは果たして不可能なのだろうか、それらを育むことは不可能なのだろうか。私は決してそのように思わない。また、それらは現代社会において無益なものなのだろうか。私は全く逆だと思う。このような現代社会だからこそ、道徳心や霊性を育んでいく必要があると思うのだ。

この問題意識と直面した時、具体的にこれから自分は何をする必要があり、どこに行くべきかの道筋が見えた。それらを全てノートに書き留めてから、夕方の仕事を再開させることにした。2017/8/3（木）

No.34: A Feeling of Awe toward Copenhagen

I arrived at Copenhagen at 7PM yesterday. This city possesses historical and cultural profoundness that has been fostered by the accumulation of long time. The profundity brought me a feeling of awe. I was just walking around the city, having a sense of admiration.

As human beings develop throughout life, a city does so. The fact strikes me again. All I could do was revere the historical accumulation of this city. Wednesday, 8/9/2017

【追記】

上記の日記は今から一年以上前に書かれたものだが、この頃から「霊性教育」という言葉を用いてその重要性について考えていたことがわかる。そこから一年の時間を経て、ようやく自分の中の何かが熟成され、その探究に取り掛かり始める日を迎えた。自らの関心を少しずつ育んでいくことがどれほど大切なことか、そしてそれがどれほど緩やかになされるものかを改めて知る。フローニンゲンに向かう列車の中：2018/9/3（月）16:12

1390. 示唆に富む夢

不気味な灰色の雲が空を覆っている。早朝にその空を見た瞬間、一日の行く末がわかるかのようであった。だが、天気の移り変わりの激しさを考えれば、今日の行く末など誰も正確にわかりはしないだろう。天候の変化が示す小さな機微は、いつも私の内側の世界に微細な変化をもたらす。その微細な変化のおかげで、毎日がどれだけ色彩に満ちたものになるかは計り知れない。自分の内側の微細な変化を頼りに、今日も少しずつ前に進みたいと思う。

昨夜は印象的な夢を二、三ほど見た。夢の中で私は、箱根から新宿に向かおうとしていた。ちょうど箱根駅で切符を購入しようとしている最中であり、待っている私の年齢は中学生ぐらいであった。ちょうど私の前で切符を購入しようとしているのは、中学校時代の友人だった。彼女が随分とゆっくり切符を購入しようとしているものだから、出発時刻が刻一刻と迫ってきた。

最初はなんとも思わず、特に焦ることもなかったが、やたらと切符の購入に時間をかける彼女を見て、何か問題でもあるのだろうかと心配になった。新宿行きの特急列車が到着するまで残り21分となったところで、ようやく彼女は切符を購入したようだった。自分の番が回ってくると急いで切符を購入し、駅のプラットホームに向かった。プラットホームに到着すると、また別の友人と出会った。

彼と会話を交わしていると、彼の内側に寄生虫が潜んでいることがわかった。その気づきを得た瞬間、彼の口から黒々と輝くゴキブリのような虫が飛び出した。それは彼の口から地面に落ち、地面を

素早く這いつくばってどこかに逃げようとしていた。私はその虫を退治するべく、ガスバーナーのような器具を使って焼殺しようとした。しかし、激しい炎を浴びせても、その虫は一向に死ぬ気配がない。「なんて強い生命力なんだ」という言葉が驚きと恐怖とともに自然と漏れた。

そのゴキブリのような黒々とした虫は、ガスバーナーの火を浴びて弱るどころか、力を増しているように思えた。事実、より攻撃的になり、私たちに向かって襲いかかってきた。ガスバーナーの器具でその虫を払いのけることが精一杯であり、逆に私たちが逃げる羽目になった。そこで夢の場面が変わった。

その次の場面では、私は自分が通っていた小学校の教室にいた。瀬戸内海を見渡すことのできる、高学年用のある教室だ。おそらくそれは、六年生の時の教室だろう。教室には他の生徒もいて、今から席替えが始まるようだった。この夢の中の私は身体的には小学生だったが、精神的には成人の成熟度を持っているようだった。

教室で席替えの指示をする先生や他の生徒の振る舞いの意図がよくわかる。他の生徒はこれから始まる席替えにはしゃいでいたが、私は至って冷静だった。冷静に事の進行を見守っていると、一人の女の子が私に声をかけてきた。彼女の申し出に従い、その子と隣の席になる約束を交わした。

どうやら最初に女子が席を決める番のようであり、男子はいったん教室から出た。女子が席を決め終えたところで交代し、男子が教室に入った。彼女の指示した席は、瀬戸内海を見晴らすことのできる教室の右端にある。その席に近づいてみると、すでに別の女子生徒がそこを確保していた。

女子同士が隣になることも可能なルールだったか一瞬戸惑ったが、すでに席が確保されてしまっていたのであれば仕方ないという気持ちになった。その席から離れ、空いている席を見つけようとしたが、一向に空席が見つからない。ゆっくりと席を選んでいるうちに自分だけがまだ席を見つけられていないことに気づいた。廊下側の席を眺めた時、銃を持った人間が廊下側から教室に入ってきはしないかという不安がよぎった。

あれこれと空想や考え事をしているうちに、自分だけが席を確保できていない状態になってしまったのだ。しかし幸いにも、一つだけ席が残っていることに気づき、その席は隣に座ることを約束した女の子の席の斜め前にあった。約束を完全に果たすことはできなかったが、斜めがけならまだいい

だろうと思って、私は安堵の気持ちとともにその席に着いた。そこで夢の場面が変わり、私は自分の部屋にいた。

そこでも私は小学生の身体を持っており、小学生の未成熟な精神と成人の成熟した精神の両方を持っているようだった。先ほどの女の子とその友人が家に遊びに来て、三人で雑談をしていた。

部屋の作りが奇妙であり、背の低い本棚が部屋を区切るかのように部屋の真ん中に置かれていた。彼女たちの話を聞きながら、私は本棚から一冊の書籍を取り出した。表紙のデザインとそれを持った時の重みから、どうもそれはカントの哲学書のようであり、本を開くと、中身の文字が全てチェック柄だった。本を正面から読むとそのチェック柄だけが浮かび上がる仕組みになっていて、何が書いてあるのか一向にわからない。

自分の部屋で熱心に何かを話している二人の友人の話を聞きながら、ソファに腰掛けて体を傾けてこの書籍を眺めた瞬間に、突然文字が立ち現れた。どうやら、この書籍は真正面から読んではならず、体を傾けながら読むことを要求しているようだった。その気づきを得たところで夢から覚めた。

昨夜見た夢にはいくつもの重要なシンボルが現れた。とりわけ印象的なのは、箱根から新宿に向かう特急列車を待つ駅のプラットホームで出会った友人の口から出てきたゴキブリのような虫である。

一昨年、日本で生活をしていた時に、ある日、府中の自宅で昼寝をしていた際に強烈なビジョンを見た。そこで私は、自分の内側に潜む無数のゴキブリのような虫が、地獄の業火に焼かれているビジョンを見たのである。その姿はおぞましいと言うよりも、地獄の業火があまりにも鮮やかであり、それは極めて美しい光景であったと言える。炎が放つ光があまりにも鮮明であり、今でもそのビジョンをありありと思い出すことができる。

ビジョンが消え、仮眠を終えた後に気づいたのは、そこで現れていたゴキブリのような虫たちは自分の中に潜む無数のエゴを表しているということだった。「地獄の業火」と形容することのできるあの炎が意味するものが何なのかは未だに定かではないが、ゴキブリのような虫は間違いなく自分の中にある無数のエゴであった。

© YOHEI KATO 2018

昨夜の夢に現れた虫は、確かに友人の口から出てきたのだが、それはもしかすると自分の中にある最後のエゴの塊を象徴しているのかもしれない。結局、その虫は生半可な炎で死滅することがなく、逆に攻撃性を発揮しながら私に襲いかかってきた。

ここからわかるのは、この虫こそが自分が乗り越えるべき最後のエゴの障壁だということであり、それは生半可な形では乗り越えることができないということだ。一昨年のビジョンで見たように、地獄の業火が必要であり、このエゴの塊を業火で焼き尽くさなければならない。だが、上記で述べたように、その業火が何であるかがわからないがゆえに、今の私には最後のエゴの障壁を乗り越えるための打つ手がない。

最後の夢の場面において、哲学書の中身がチェック柄であったことは興味深い。体を傾け、視線を変えると、文字が浮かび上がってくるという点が特に何か重要なことを示唆しているように思える。真に意味のある書物というのは、常に深層的な意味を隠しており、書物に書かれている文字を真正面から読んではならないことを私に伝えているようだった。深層的な意味を捉えるためには、視点をずらすことが出発点となり、そこから意味の解読に向けた歩みが始まるのだ。

真っ向から書物に向き合う時期を経て、斜めからその書物と向き合い、再び真っ向からその書物に向き合う時期が来ることを私に教えるかのような夢だった。昨夜の夢は非常に示唆に富む内容であり、もしかすると折を見て今日の夢の内容を思い出すことになるかもしれない。そんな予感がする。
2017/8/4（金）

No.35: Essence and Pure Sensations

I left Copenhagen to Oslo. I took a train at Copenhagen Central Station at 8:20. Just after I sat down on my seat, I began to read Emerson's writings. Quite coincidentally, Emerson's philosophy about poems was exactly what I thought in the morning in the hotel today.

Poets can grasp the essence of objects, and they can represent pure sensations──thoughts, emotions, feelings, etc.──in the form of poem. Here, I thought that we could trace back to the essence of objects if we can comprehend the uncontaminated sensations of poets. On the other hand, when we create a poem, we have to capture the essence of objects and to embody our pure

sensations in our poem. Otherwise, our creation would be lack of profundity.

Thursday, 8/10/2017

1391. 母国語と父国語の真なる出会い

昨日、突然に自分の内的言語世界が変容を遂げた。それは避けようのないものであり、その日がついにやって来たのだということを受け入れることしかできなかった。もはやそうした内側の宿命的な流れに逆らうことをせず、宿命の流れの中で生きることを固く誓った。私は少し前から知っていたようなのだ。もはや、母国語だけを通じて自分の内側の世界を表現しきれないということを。

その衝動が私を作曲実践へと向かわせたのは確かである。ただし、作曲という音楽言語をもってしても、まだ表現しきれないものが無数に自分の内側に蠢いており、それが形となって外側の世界に現れることを願っている姿が見えた。その願いの実現に向けて自分の内側が動き出すというのは、当然の成り行きだったように思う。母国語だけではなく、「父国語」としての英語を用いて自分の内側にあるものに生命を与え、外側の世界に形を持って生み出すこと。これをしていかなければならない。

その具体的な方法が、英語で日記を書くということだった。だが、これは日々の行動記録という側面は一切なく、日々の生活で直面する外的事実を書き残すことはほとんどないだろう。そのようなことは全くもって無意味である。外的現象の輪郭をなぞるのではなく、そうした現象から喚起される内的現象に焦点を当て、それを言葉の形に残しておくのだ。それが何よりも重要だ。

昨日から突然に始まったこの衝動的な実践は、すでに私の内側にはっきりとした変化をもたらしている。父国語を自分の内側の深層に組み入れていくことによって、最初から私の内側にあった母国語の質感が変わりつつある。それは言葉の選択や語感などに如実に表れている。ここから私は、父国語を自分の内側の深層の基底まで浸透させるように尽力したい。基盤の上にそれがあるのではなく、それそのものが基盤になるのである。

これまでの私は、自分の内側の母国語を懸命に守ろうとしていた。それを死守しようとする思いが、これまでの一連の日記の量に表れている。しかし、もはや私はそれを死守する必要などないことに

気づかされた。自分の内側の母国語は父国語との真なる出会いを求めるようになったのだ。ここからは、存在の髄まで英語を滲み渡らせていく試みに従事したい。

今日は午前中に、森有正全集第一巻の『バビロンの流れのほとりにて』の続きを読み、続く『流れのほとりにて』を読み進めたい。昨日の予定通り、今日は自分の研究に関する専門書を読むことを極力控えたい。少しばかり余白を設けることをあえて行いたいのだ。

今日は昼食後から、オンラインゼミナールの自主勉強会とオフィスアワーがある。私が参加するのはオフィスアワーからだが、受講生同士の自主勉強会の対話はいつも充実しており、後から録音を聞くことが今から楽しみだ。明日と明後日に第三回目のクラスが行われるため、それに向けて説明資料の中身を再度確認しておきたいと思う。

拙書『成人発達理論による能力の成長』の中でも、第三章はとりわけ重要な内容であり、今回のクラスではその章を中心に扱う。カート・フィッシャーが提唱した13のレベルについて一つ一つ取り上げ、いくつかの実践的なエクササイズを用いて、それらの段階特性の理解を促すようにしたい。時間が許せば、その他の会話事例を紹介したり、レクティカの能力測定サービスの具体的な内容を紹介しようと思う。2017/8/4（金）

No.36: Uniqueness and Universality

I'm on a bus from Lund (in Sweden) to Oslo. This bus trip takes more than six hours, which may sound a little bit long.

Time passes quite quickly, but I can feel the invariant quality in my existence. Most passengers are sleeping, although it is still 10:30 AM. I'm reading and writing as usual. Anywhere anytime, all I can do is read and write──and breathe.

Is the scenery through a window of the bus Swedish? No, it is something earthy and universal.

Can we discover a unique creation that is generated only in a particular place in the world? The creation can be art, culture, and even our thoughts, feelings, and sensations.

We have to find and admire such a unique production in any places. However, at the same time, we should uncover the veil of uniqueness to discover the universality of any creations.

Thursday, 8/10/2017

1392. おぉ、そこには偏西風

ポツリポツリと雨が降り始めた。午前中に小雨が降って以降は、比較的天気が安定していたのだが、夕方からまた天気が崩れ始めた。毎日思うのだが、天気を観察するのは実に面白い。天気の変化から学ぶことが多々あるからだ。

天気を観察するというのは、特に、天気の変化を捉える自分の内側の世界の変化を理解することに有意義である。ある瞬間における外側の天気をどのように自分が描写するかは、そっくりそのまま自分の内側の状態を表している。そして最も興味深いのは、これまで幾多の数の描写を天気に対して行ってきたが、完全に同一の記述が一つもないということだ。これは驚異的なことではないだろうか。

この世界には、二度と繰り返されないものが本当に存在しているということを強く実感させられる。逆に言えば、完全に同一のものが繰り返されることなどこの世界にはないのではなかと思わされるほどである。それほどまでに、内外の世界は変化で満ち溢れている。そうした変化の中に見られる方向性や規則性というものを発見するように努めている。おそらく、これまでの天気に関する自分の描写を全て抽出してみると、何らかの方向性や規則性が隠れていることは明らかだろう。

ただし、今はそれらについて分析することが問題なのではない。とにかく、刻一刻と変化していく外面世界の中にあって絶えず変化していく内側の世界を書き留めていくことが大切だ。変化という曲線的な流れの中にある一つ一つの点を捉えていく。点を刻んでいくためには、それに注意を向け、それを書き留めていかなければならない。

書斎の窓から真正面に見える空は雨雲で覆われている。しかし、西の空は雲がなく明るい。たった今、私は一つ大きな発見をした。あまりにも些細なことであり、教養のある人にとってみればあまりにも当たり前かもしれないが、なぜ書斎の窓から見える雲がいつも一定方向に向かって動いているの

かがようやくわかったのだ。これは私に大きな驚きをもたらし、同時に、大きな喜びの感情をもたらした。書斎の机を今の配置にして以降、私は何百日と同じ空を見てきた。

空を眺めるたびに雲があるのであれば、それらをまじまじと見つめてきた。しばらくすると、雲の色や形だけではなく、雲の動く速度に着目するようになった。当然ながら雲が早く動いていく時もあれば、ゆっくりと動いていく時もある。雲の動きを観察することを積み重ね、今日ようやく、「そういえば、なぜ書斎から見える雲はいつも同じ方向に向かって動いているのか？」という問いが立った。

これまでも、おそらく無意識的に気になっていたのだと思うが、それが明示的な問いになったのは今日が初めてであり、言葉の形にしてみて初めて、その問いと真剣に向き合うことができた。やはり、言葉にしなければダメなのだ。言葉にしなければ、何も見えて来やしないのだ、ということを身をもって教えられた。

書斎の窓から見える雲が、いつも西から東に動いている理由はとても単純なものだった。オランダ上空に偏西風が絶えず吹いているからだった。そこからさらに、偏西風の発生要因とメカニズムについて関心を持つことは必然だが、今日はそこから先には進まない。偏西風という地球の神秘が、書斎の窓から見える雲の動きを支えているということを知れただけで、幸福感で一杯だった。

今この瞬間に見える灰色の雨雲も、偏西風からの贈り物なのだ。そして偏西風は地球からの贈り物なのだ。そのように考えるだけで、私の心は至福さで満ち溢れていた。

今回の雲の一件で、また色々なことを考えさせられた。「偏西風」という概念を知っており、その知識を常に実用に活用できる状態にある人にとっては、私のように何百日をかけてようやく今日のような発見をすることはなかっただろう。そうした基礎的な知識を持っている人であれば、私が費やしてきた数百日の間に、オランダの天気に関するより深い理解と知識体系を獲得していたことだろう。

もちろん私は気象学の専門家ではないため、今回の発見に数百日の時間がかかったことについて何とも思っておらず、むしろそのような時間がかかっていたことを忘れさせてくれるほどに大きな喜びを今日感じた。ただし、自分の専門領域に関して言えば、やはり既存の知の体系の中に入り、その体系を自らのこれまでの知識と経験と照らし合わせながら再解釈し、自らの体系を構築していくこ

© YOHEI KATO 2018

とが重要だと痛感させられる。つまり、最低限の知識に関しては先人の力を大いに借りるべきであり、そこから自分の知識体系を構築し、自分なりの新たな発見事項をしていくことが重要なのだ。

知性の発達に関して新たな発見事項を見出すためには、もしかすると数年や数十年かかることもあるかと思われるが、それでも既存の知識体系をしっかりと学んでいくという姿勢は絶えず持たなければならないだろう。

目の前の雨雲が教えてくれたのは、私は自分が想定している以上にもっとずっと学ぶ必要があるということだった。この世界は、自分の既存の知識という度量衡で捉えられるよりもずっと複雑で未知なものなのだ。それを片時も忘れてはならない。2017/8/4(金)

No.37: Nature and The Nature

It is almost Oslo. I could notice a subtle difference Swedish and Norwegian landscapes.

As Emerson argued, we can learn from nature something larger than us. Nature reminds us of our true nature.

My curiosity captures the two meanings of the word “nature.” “Nature” represents the vast amount of sources for all existence; “the nature” corresponds to the essential quality of all existence. Both “nature” and “the nature” integrate into a transcendental aspect of reality.

Can we find our true nature, seeing nature? Can we discover the ultimate unity between nature and our true nature? If not, what are you seeing at this present moment? Thursday, 8/10/2017

1393. キルケゴールの眠る地へ

「その飛び方はおかしい」というほど不規則に白い小鳥が空を舞っている。おそらくそれは、外を吹き抜ける激しい風によるものだと思われる。

昨日に引き続き、今日も風が強い。フローニンゲンで生活を始めて一年が経ったが、二日連続して風の強い日などこれまでなかったように思われる。もしかすると今は季節の変わり目に当たるのかもしれない。まだ八月の初旬だが、もう秋の声が聞こえて来るかのようだ。

昼食前は天気が崩れる前だったので、四日分の食料の買い足しに出かけた。今日の買い物は、北欧旅行に行く前の最後の買い物となる。旅行の出発日の朝に何を食べるのかも事前に計画を立て、それを忘れずに購入した。あと数日後に始まる北欧旅行を思うだけで、小さな幸福感が滲み出てくる。

音楽は北欧旅行の友であり、デンマークとノルウェーが生んだ作曲家について調べていたことを以前に書き留めていたように思う。今日は、先日に調べた作曲家の曲を数多く聴いていた。いくつか印象に残る作品があったのは嬉しい収穫であり、旅行の移動中にそれらの曲を改めて聴きたいと思う。実際にデンマークとノルウェーの地で、それらの土地が生んだ作曲家の曲を聴くことは、また違った印象と感覚を私にもたらすだろう。

デンマークの作曲家ニルス・ゲーゼとエドヴァルド・ヘルステッドの作品に印象的なものがいくつもあり、今はカール・ニールセンの作品を聴いている。フローニンゲンを出発する初日に聞くのは彼らの音楽になるだろう。初日はまず、コペンハーゲンで過ごすことになるが、ふとしたきっかけで、哲学者のセーレン・キルケゴールがこの地の出身であることがわかった。さらに調べてみると、キルケゴールの探究姿勢に強い共感を持った。

数日前に、日記文学の果たしてきた功績とそれが内包する価値について考えていた。そこから日記のあり方をもう一度自分の中で再定義し直すことを行っていた矢先、キルケゴールも日記を綴る習慣を持っていたことがわかった。彼は幼い頃から、日々の出来事を内省的な日記として書き残していたのだ。キルケゴールは42歳という若さでこの世を去っているが、死を迎える日まで生涯にわたって日記を執筆し続けていたという。

キルケゴールにまつわるこうした史実が、私の関心をキルケゴールに向かわせた。残念ながら、コペンハーゲンにはキルケゴールに関する博物館がないようだったが──調べてみると、世界中どこにもないようだ──、彼が埋葬されている墓がコペンハーゲンにあることがわかった。なぜだかよく分

からないが、そこには必ず足を運んでみなければならないという気がしている。キルケゴールの眠る地を訪問するまで、あと四日ほどとなった。2017/8/4(金)

No.38: Oneness and Manyness

I arrived at Oslo yesterday. I walked around the center of the city. All of a sudden, I touched upon the oneness and manyness of reality. It gave me a tender and blissful feeling.

The contact with the oneness and manyness lasted for a relatively long time, but the relativity of time was quite arbitrary. A euphoric and ecstatic emotion welled up from the deepest dimension of my existence. I intuitively realized that I was one and many. Friday, 8/11/2017

1394. 集合意識に浮かぶ船

外の世界がピタリと止まっている。それはまるで静止画のようだ。一昨日、昨日とは異なり、今日は風がない。書斎の窓の外に広がる景色がとても穏やかに見える。いや、それは一切の動きがないがゆえに、不気味にすら思えるほどだ。

空全体にうろこ雲が覆っている。雲と雲のかすかな隙間が白く輝いている。一匹の白い鳥が東から西へ向かって飛び去るのを見たとき、私は少しばかり安堵した。自分が変化のある世界の中に今日も生きていることを知ることができたからだ。

昨夜は諸事情があり、いつもより20分就寝時間が遅れた。そのため今日は少し遅く起床したが、心身の状態はいつもと変わらないようだ。昨夜は夢の中で、何かのテーマに対して講義を行っているようだった。オンライン上ではなく、実際の人を前にし、どこかの場所で講義を行っていた。

講義が中盤に差し掛かると、参加者の方との意見交換が徐々に盛り上がり、自分の説明の熱も自ずと上がっていった。ある時、あまりにも熱を入れて話しすぎる箇所があり、声が出ないほど喉が枯れる状態になった。本当にそれ以上声が出ないような状態に追い込まれそうになったため、私は持参したのど飴を探していた。無事にのど飴を発見し、それをすぐに口に運んで講義を進めていった。

飴を舐めながら話をするというのはあまり礼儀にかなったことではないと思いながらも、そうせざるをえないような喉の状態であったため、以降は飴を舐めながら話を続けることになった。そこから講義が静かに進行していき、静かな進行に合わせて夢から覚めていった。

昨夜の夢の印象は、一昨日に見た夢の印象よりも薄い。夢の印象に関しても濃淡があり、それは無意識のどのような状態を示唆しているのか気になるところである。一つ興味深い点を記載しておくと、それは昨日の夢の中で私が講義を行っていたことだろう。実際に今日の午前中にオンランゼミナールの第三回目のクラスがあり、それに向けた準備を昨日行っていたことが夢に作用していた可能性がある。今回のゼミナールを取り巻く集合意識の力がとても強く、さらにはまだその変動性が高い状態であることが、私個人の無意識に強く影響を与えているようだ。

教師や講師にとって、どのような集合意識をどのように醸成していくかは極めて重要なことだと思われる。なぜなら、その性質と生成プロセスいかんによって、学習の質が決定されてしまうからであり、下手をすると教師や講師が集合意識の中に飲まれてしまう危険性もあるからだ。

実際のクラスの中でファシリテーションをしていくということは、集合意識の操作というよりも、集合意識の上に浮かぶ船の舵取りに喩えることができるかもしれない。ファシリテーターが集合意識という巨大な意識空間に直接的に働きかけることは極めて難しく、それゆえに、より触感のある小さな意識空間の舵取りをするように心がけることが賢明なのではないだろうか。

どうもこれまでの私は、不可視の巨大な集合意識に働きかけようとするような意識があり、そうではなく、より小さな単位かつ可視的な意識空間を育んでいくことを意識する必要があることに気づく。そうした気づきをもとに、本日からの第三回目のクラスを迎えたい。2017/8/5（土）

No.39: Munch Museum

The second day in Oslo started. I went to the Munch Museum, which I had wanted to visit once since I decided to travel to Oslo. I will not write about each art work in detail, but I just want to mention that “The Sun (1913),” “Self-portrait (1888),” and “Self-portrait with Hands in Pockets (1926)” struck me very much. These paintings captured my soul and resonated with all of my existence. All I could do was stand in front of the paintings.

If we found an essential art work that is resonant with our soul, we absolutely would not take a photo of the work. The most significant art work for us compels us to just stand quietly in front of it. Taking a photo is a reliable sign to indicate that the art work is inessential for us. Friday, 8/11/2017

1395. フォボスとタナトス、言葉と発達

八月に入ったが、相変わらず涼しい日々が続く。書斎の窓を開けていると寒いぐらいなので、換気のために窓を開けることはあっても、基本的には窓を閉めたまま部屋の中で過ごすことが多い。実際に今は窓を閉めており、部屋の中では薄手の上着を羽織っている。昨年の今頃はフローニンゲンでの生活を始めた頃であったが、その時はもう少し夏らしさを感じていたように思う。

過ごしやすいといえば過ごしやすい気候なのだが、日本の夏の印象と感覚が依然として心身の中に残っているため、今のこの気候はやはり少し違和感をもたらす。早朝に現れていたうろこ雲が変化を遂げ、のっぺりした柔らかそうな灰色の雲が空全体を覆っている。

昼食後、その雲から細かな雨がパラパラと降り始めた。今日の午前中は、オンラインゼミナールの第三回のクラスがあった。本日のクラスも、私にとって実に多くの気づきと発見をもたらしてくれるものだった。普段東京から参加している受講者のある方が、今日は宮城県の地方から参加をしてくださり、話をする背後にセミの鳴き声が聞こえてきたことが強く印象に残っている。セミの甲高い鳴き声を聞いた時、日本の夏の心象風景が甦ってきた。実際にその場にいなくても、この時期の日本の夏の様子を感じ取ることができたことは、懐かしさとともに喜びの感情をもたらしてくれた。

本日のクラスの内容について印象に残っていることは二つある。一つは、以前の日記で書き留めていたように、領域を問わず、人や組織の成長を考える際に、フォボス的な発想かタナトス的な発想で成長を捉えてしまいがちな傾向がこの現代社会には見られるという点である。フォボス的な発想というのは、常に上へ上への成長を希求し、自らが通ってきた過去の発達段階を否定するような考え方を言う。言い換えると、フォボス的な発想を持つ人は、低次の発達段階の価値を認めず、絶えず成長することを善とする。

一方、タナトス的な発想というのは、高次元の発達段階を排斥する形で、低次元の発達段階を守ろうとするような考え方を指す。別の表現で言えば、タナトス的な発想を持つ人は、高次元の発達段階の価値を認めないがゆえに、低次元の発達段階で停滞してしまう傾向を持つ。現代社会には、この二つの発想のどちらか一方を持つ人が多く、二つの発想の闘争状態にあるのが現代の課題の一つだろう。

教育や企業社会において、フォボス的な発想を持つといのは、子供や成人の成長を無理に引き上げようとする試みと結びついているだろう。また、タナトス的な発想は、霊性を涵養する妨げとなってしまうだろう。実際に、現代の教育や企業社会において、霊性が真剣に取り扱われることはなく、むしろそれは忌避されるものとなっており、人間が人間として生きていくために極めて重要な霊性を涵養する機会がほとんど無いということは、非常に嘆かわしい。

受講生の方からのコメントでもあったが、フォボス的な発想というのは男性性のシャドーの現れであり、タナトス的な発想は女性性のシャドーの現れであると見ることもできるだろう。この視点は非常に興味深い。私たちは本来、男性であっても自己の内側に女性性を宿しており、女性であっても男性性を宿している。私たちが真に成熟を遂げていくためには、自己の中にある対極側の性を発見し、それを排斥することなく己の中に統合していく必要がある。それをしなければ、上記のような極端な発想で成長というものを捉えることになってしまうだろう。そしてそれは、成長を捉えるのみならず、成長をどのように育んでいくかにも大きな影響を与える。

もう一つ印象に残っている点を書き留めておくと、それは言葉と発達の関係である。レクティカの設立者であるセオ・ドーソンが今から20年ほど前に行った研究で面白いものがある。それは、言葉と発達の相関関係に関するものである。その研究では、特定領域における会話事例をフィッシャーのレベル尺度で分析し、分析結果の発達段階とそこで用いられている語彙の難易度を比較することが目的だった。

オックスフォード辞典の中に掲載されている語彙を出現頻度で分類し、語彙の難易度を明らかにした上で、調査に用いた会話事例を再度検証してみると、語彙のレベルとその領域における能力レベルには強い相関関係があることがわかったのだ。この研究結果を見たとき、特定の領域における

知識と経験を獲得する中で、それらに形を与える言葉を獲得していくことの重要性を考えさせられたことをふと思い出した。

本日のクラスでは、その他にも改めて考えてみる必要のある項目がいくつかあったので、また別の機会に書き留めておきたい。2017/8/5(土)

No.40:Presence=Pre-essence

Edvard Munch insisted that the presence of motif was a key for painting. What I felt from his paintings was exactly what he proposed. I suddenly realized that the presence of his any motif embodied its essence. This realization led me to another recognition that presence is prerequisite for the essential aspect of existence. In other words, presence intrinsically envelops the essence of any being. Therefore, the “presence” may be equal to “pre-essence.” Friday, 8/11/2017

1396. 公案的笑い

夕方の仕事に取り掛かる前に、少しばかり休憩をとった。行きつけのチーズ屋で購入したナッツ類を食べながらコーヒーをゆっくりと飲む。食卓の窓からぼんやりと外の景色を眺めてみる。午前中の雨雲が消え去り、今は晴れ間が広がっていて、まばゆい太陽光が辺りに降り注いでいる。

天候の変化が激しい環境の中で生活をしていると、大きな変動性に左右されないための弾力性のようなものが自分の内側で養われているのがわかる。いやそれよりもむしろ、大きな変動性の波にピタリと自己を寄せることができるようになりつつある、と言った方が正確かもしれない。というのも、変動性というものを対象化してしまい、その波にうまく乗るための弾力性を措定してしまうと、自己と変動性の波が乖離してしまうのだ。結局、こうした乖離が自己を苦しめることになる。

であれば発想を少し変え、変動性という波に乗ろうとする自己を想定するよりも、その波と自己を合一化させる形で捉えるのだ。そうすると、変動性の波にもはや乗る必要などなくなる。なぜなら、自己がその波に他ならないからだ。このように考えてみると、随分と自分の心が平穏なものになることがわかる。そこには対象をコントロールしようとする意図がなく、対象を手放すことによって真にその

対象になる、という現象が起きる。一つの現象を手放すことを経た後にやってくる真の合一は、この世界で生きようとする自己が消滅し、そこにはただ生きるということだけがある。

ただ生きるということを通じてこの世界を実際に生きてみると、何とも言えない安らぎと晴れ晴れとした感じがする。書斎の内側に流れるバッハのゴルトベルク変奏曲と書斎の外側を流れるさざ波のような優しい風。そういえば先ほど、一つハッとさせられたことがある。

何気なく自分の利き手でコーヒーカップを掴んだ時、利き手を用いればいかなる物も掴むことが可能なのだが、たった一つ掴めぬものがあることに気づいた。それは自分の利き手だった。いくら一生懸命になっても、自分の右手で自分の右手を掴めないのだ。

その瞬間、「公案的笑い」が自分の芯から込み上げてきた。「悟りに到達した」と主張する人や「悟りを開いた」と主張する人をつくづく信じることはできないと思った。悟りなど到達するものではないし、到達されるようなものではない。悟りなど開くものではないし、開かれるものではない。悟りは、常に到達されており、常に開かれているものである。

ただ、私たちがその単純な真実に気づかないのだ。自分の右手で自分の右手を必死になって掴もうとする人がいかに多いことか。私たちはいつまでそのような幻影を追いかけようとするのだろうか。偉大な覚者たちの言葉の意味が、ようやく自分にもわかりつつある。2017/8/5（土）

No.41: Σ∞

I visited the Oslo National Museum which possesses a number of great art works such as Munch's "Scream" and Renoir's "After the Bath." Needless to say, those paintings inspired me, but the most memorable experience to me was drawing in one room.

There were two statutes standing in the center of the room; the left statute represented a boy, and the other did a mother. I rarely sketch, but the atmosphere of this room encouraged me to do so. I sat on a chair near the statutes and started to draw by pencil. Once I concentrated on the two statutes, my eyes captured their abstract qualities.

20 minutes later, my artwork was finished. I ended up drawing the boy's statue as the symbol of Σ and the mother's one as the symbol of ∞.

A hundred of drawings were on the walls in this room. All of the works except mine were drawing two concrete objects──two human bodies. However, my work depicted abstract dimensions of the objects. Probably, I activated my soul's eyes, whereas others utilized their physical eyes. Both styles follow the rule of drawing because they express exactly as objects are.
Saturday, 8/12/2017

1397. 欧米生活の真の始まりと人工知能について

昨日と今日において、英文を読むことを控えていたためか、逆に頭が冴えない気がする。断片的な知識の重たさが脳にあるような感覚が現れている。目薬を目にさして目をすっきりとさせるように、短めの英文を執筆することによって脳をすっきりさせようとした。この試みはかなり効果があるようだ。

数日前に突如として、英語が自分の存在の内側に流入して以降、これまで英語によって明瞭な形にすることができなかったような内側の微細な思考や感覚が英文という形で姿を表すようになってきた。欧米での生活も今年で六年目を迎えたが、その現象をもってして、真に欧米で精神生活を営む日がようやく始まったと言えるだろう。これまでの五年間は準備期間に過ぎなかったのだ。ようやく、今から本当に欧米での生活が始まる。それを私は喜びの感情を持って迎えたいと思う。

確かに、これまでの五年間においても、科学的な英文を書くことは絶えず行っていた。しかし、これまでの私の英語空間は、観想的な眼を持ってして捉えられる現象を英文で表現できるほどに成熟していなかった。ようやく一つの大きな殻を打ち破り、脱皮をする時が来たのだと思う。

今日の午前中のゼミナールの中で、人工知能を活用した発達測定について少しばかり言及をした。受講生のコメントをもとに、人工「知能」という言葉が与える感覚について考えていた。そこでは、人間が持つ「知性」と機械が持つ「知能」が確かに区別されている。試しに、人工「知性」と言った場合に、大きな違和感が生じることがわかる。

人間の知性と機械の知能を分ける何かがここにありそうなのだ。「人工知能」という日本語を生み出した人は誰なのかが気になる。その方は、おそらく人間の知性と機械の知能を分けるものを掴んでおり、そうであるがゆえに両者の言葉を使い分けたように思うのだ。

ちょうど一昨日、以前に注文しておいた人工知能に関する三冊目の専門書が届いた。それはオックスフォード大学出版から出版された“Artificial Intelligence: What Everyone Needs to Know (2016)”という書籍だ。書籍の到着後、早速中身を一瞥してみると、オックスフォード大学出版の書籍にしては随分と一般向けに書かれたものだという印象を受け、読みやすそうだと思った。

北欧旅行へはエマーソンの全集一冊だけを持っていくことを考えていたが、本書も持っていきたいという思いが湧き上がる。分量としてそれほど多くないので、できれば明日と明後日にかけて読み終え、北欧旅行へはやはりエマーソンの全種だけを持っていくようにしたい。いずれにせよ、人間の知性と機械の知能を分けるものについて少しでも何かを掴めるように本書を紐解きたい。2017/8/5(土)

No.42: Stillness in Summer

I'm on a train from Oslo to Bergen. Is it summer now? Yes, it is, but I can see through the window the remaining snow on the mountains. This splendid scenery lets me forget what summer is. In fact, I have to redefine summer by myself.

The temperature outside reaches 8℃. As the snow remains still on the mountains, everything looks dynamically static. The stillness encourages me to forget time but to remember who I am. Saturday, 8/12/2017

1398. 哀愁と希望

哀愁を漂わせながらも、それでいて清々しい夕暮れの空を久しぶりに見た。時刻が夜の九時に近づき、いよいよ太陽が沈む時間となった。太陽が今日という一日の最後の光を振り絞り、それが空に伝わっているかのような美しさが、今目の前に広がっている。沈みゆく太陽とその光を受けた夕

暮れの空は、確かに一つの寂しさを結晶化させている。だが、それは決して否定的な寂しさではなく、その寂しさの核には明日への希望が宿っている。

自宅からほど近くの空に、透明がかったいくつかの雲の塊がゆったりと西から東へ移動していくのが見える。もう本当にその雲は手に掴めそうなほどの距離にある。それは、掴めそうで決して掴めないものを象徴しているかのようだ。

今日という一日を振り返りながら、今日の自分は何を見て何を考えたのかを回想していた。しかしよくよく冷静になって考えてみると、それは回想ではなく、自分に新たな気づきと発見をもたらす確かな前進だった。今日を振り返るというのは、後ろに向かって振り返るのではない。それは間違いなく、前に向かう行動である。その証拠に、今日を振り返る今の自分に、また新たらしい思考や感覚がもたらされているのだ。明日はどんな日になるだろうか。

欧州で過ごす日々は永遠ではない。それは欧州という場所に限らず、この世界で過ごす日々は永遠ではないのだ。それは自分だけでなく、誰にとっても同じだろう。とりわけ欧州での日々は、自分にとって格別の意味を持つ。これまで育んできたものを解体することを余儀なくされ、もう一度自分の手で新しい構築物を建設していくことに従事せざるをえないのだ。

ひとたび新しい建築物が生み出されると、それが以前のものとどこが違うのか一見すると分からない。だが、その違いは自分だけが知っている。この創って壊すという作業が毎日毎日行われていることに、自分だけが気づいているのだ。自らの存在をかけてこの世界に何かを創り出すというのは、そのようなプロセスを経なければ決して成し遂げられるものではない。そのようなことをつくづく感じる。

そうこうしているうちに、太陽が間もなく西の空に消えていく時刻となった。明日の自分は何を壊し、何を創り出すのだろうか。壊すという行為には独特の寂しさがあり、何かを創り出すという行為にも独特の寂しさがある。だが、壊すという行為と創り出すという行為が織りなす連帯感は、明日への希望を私にもたらす。一日を終えることの静けさを超えて、明日に賭けてみたいという思いがまたふつふつと湧いてくる。2017/8/5（土）

No.43: Severe Winter and Desperate Loneliness

Finally, I arrived at Bergen, which is a southwestern city in Norway.

I have expected to visit it very much since I decided to travel to Norway. Soon after I began to walk from the central station to my hotel, I had no choice but to remember the severe winter in Groningen last year. Then, I was seized with a desperate feeling of loneliness out of the blue. The feeling did not matter whether somebody was beside me. It was an existential loneliness. When I visited the Munch Museum in Oslo, I noticed that Munch also had a sense of isolation.

Can a desolate feeling of loneliness transform into the tomorrow's blue sky? I hope so very much. Saturday, 8/12/2017

1399. 年間の能力成長率

とても静かな日曜日の朝。気温の暖かさではなく、別種のぬくもりを喚起するような朝だ。昨日の早朝は雲が空を覆っていたが、今朝は雲がほとんどない。風もほとんどなく、目の前に見える木々の葉がおとなしくその場にたたずんでいる。赤レンガの家々の屋根に太陽光が照らされ、ほのかな黄色を発している。

今日もこれからオンラインゼミナールのクラスがある。昨日のクラスに関しての振り返りが完全にできておらず、印象に残っている点をまた書き留めておきたい。

私が以前在籍していたレクティカの調査で一つ興味深いものがある。適切な実践を積んでいる者は、一年間にどれだけ能力を成長させることができるのだろうか、というものである。この研究ではカート・フィッシャーの尺度を用いて、実践者の能力が一年間にどれだけ伸びるのかを調査した。結果は、年間に0.1から0.15ほどの伸びを見せ、実践を一切しなければ能力は一向に伸びないことが明らかになった。

この結果を見て、「0.1から0.15」という伸び率を小さいと感じるかもしれない。しかし、能力の成長というのは、適切な実践を積んだとしてもそれぐらいにしか伸びていかないということを認識しておいたほうがいいだろう。成長至上主義がはびこる世の中において、特に能力開発の現場において、

早急に人を成長させようとする傾向が強いことを考えると、この実証結果は成長至上主義的な発想に歯止めをかける役割を果たしてくれるだろう。

この研究に関してもう一つ着目するべきは、「0.1から0.15」という伸び率が子供と大人の双方においても見られるということだ。成長が早いと思われがちな子供でもそれぐらいの伸び率しかないという点、成長が遅いと思われがちな大人でもそれぐらいの伸び率を持つという点、これら二つの点が示唆することを立ち止まって考えることは重要だろう。

上述のように、子供たちのように成長期にある者たちですら、一つの能力を伸ばしていくことには時間がかかるのである。拙書『成人発達理論による能力の成長』でも取り上げたように、子供の時期に成長を急がされた者たちは、「ピアジェ効果」を経験してしまい、成人期以降の成長が止まってしまう。

確かに、子供たちは体や脳を著しく発達させていくが、知性に関する発達は体や脳の発達よりも緩やかに時間をかけて成し遂げられるものだということを常に念頭においておく必要があるだろう。一方、成人に関して言えば、成人は身体の成長が止まり、それに伴って知性の成長も止まってしまうと思われがちである。しかし実際にはそうではない。

確かに体の発達は止まってしまい、子供たちに比べれば脳も大きく発達することはないだろう。しかし、脳に関しても、子供たちのように前頭葉が大きく発達することはないが、それでも脳内の神経ネットワークは知識と経験の蓄積によってより複雑になる。これは脳に備わっている「可塑性」という特徴のためである。そして重要なのは、成長が止まってしまいがちだと思われる成人期においても、具体的な課題に取り組むという実践を積み重ねていけば、能力は継続的に成長していくのだ。

これまで私は、成人期においては課題がより高度化してくるため、成人になればなるほど成長速度が遅くなると説明していた。確かに、課題が高度化し、それを乗り越えていくための能力を獲得するのはより困難になる。しかしそれでも、適切な支援を得ながら絶えず実践に励んでいくことができれば、成人の能力は継続的な成長を遂げていくことができるのだ。その点をレクティカの研究が示唆してくれている。

© YOHEI KATO 2018

身体的な成長の著しい子供においても、能力の成長は年間に「0.1から0.15」しか伸びないのだということ、身体的な成長の止まった成人においても、年間に「0.1から0.15」ほど能力が成長してくのだということを再度頭に入れておくことは、子供たちに対して無理な成長支援をしないために重要であり、大人にとっては能力の成長を放棄しないために重要になるだろう。2017/8/6（日）

No.44: Diary for The Veritas of Humanity

Edvard Munch kept a diary throughout his life. A diary was an artistic and philosophical apparatus for him to deepen his thoughts and emotions. Also, he reflected upon human existential issues, keeping a diary. His attitudes towards the depth of human inner realms inspired me very much. A diary is an open door to the veritas of humanity. Sunday, 8/13/2017

1400. 能力測定の現状と今後

今日の午前中、オンラインゼミナールの第三回目のクラスが終了した。今日はお盆休み前の最後のクラスであり、ゼミナールはここから二週間ほどの間隔が空く。これまでの三回は毎週末行われており、一度中休みを挟むことで、これまでのクラスの内容をゆっくりと振り返ることや受講生同士の自主勉強会が開催されるゆとりに繋がってくれればと思う。学習において、こうしたゆとりというのは非常に大事だろう。

新しい概念や知識を詰め込むのではなく、それらをこれまでの自分の知識や経験とゆっくり照らし合わせていくことがなければ、学習が深まることはないだろう。

昨日と今日のクラスの中で、カート・フィッシャーのレベル尺度を活用した能力測定について紹介した。特に、マサチューセッツ州のレクティカが提供しているアセスメントサービスについて、それがどのような目的でどのように活用されているのかを紹介した。レクティカのアセスメントサービスの形式は、それが教育の世界で用いられようとも、企業社会の中で用いられようとも、ケーススタディに文章で回答していく形を取る。

例えば、教育において、物理のエネルギーという分野の学力――知識と経験の活用力――を測定したいのであれば、現実世界の中で実際に遭遇する物体のエネルギーに関するケースを問題として

与え、それに対して文章で自由に記述していく形式を採用する。同様に、企業社会においてリーダーの意思決定能力を図りたいのであれば、企業のリーダーが実際に直面するであろう課題をケースとし、それに対して文章で記述していくという形式を採用する。クラスの中では、具体的にどのような観点で分析作業を進めていくのか、そして人工知能と能力測定の関係、さらにはレクティカで提供されるアセスメントレポートの概要を紹介した。

フィッシャーのレベル尺度を活用すれば、具体的な行動についてもアセスメントすることができるのだが、学校教育の場において学力を測定する際に、そして企業社会で発揮される能力を測定する際には、言葉に着目をして分析することが重要になる。実際にレクティカのサービスも言葉の内容と構造を分析することを行っている。私たちは、知識や経験を活用する際に、それがいかに身体的な動作として現れようとも、その背後には言葉で構築されたメンタルモデルが大なり小なり存在している。

まさに、レクティカが行っているのは、そうしたメンタルモデルの質的差異を測定しているのだ──メンタルモデルは知識と経験の構造的な構築物であり、タイプ論的なマインドセットとは異なる。コールバーグ、ラスキー、キーガン、クック=グロイター、トーバートたちのアセスメント手法は、基本的に発話内容に着目することはなく、発話構造の質的差異だけに着目する。一方、レクティカのアセスメントは発話内容と発話構造の双方に着眼して評価をする点が特徴的である。

昨日の日記で書き留めていたように、発話内容と発話構造には密接な関係があることが明らかになっている。そのため、発話内容だけに囚われてしまうことは論外であるが、実は発話構造だけに着目することも十分なアセスメントではないのだ。また、私たちが能力を発揮する上で、言葉にならないような暗黙知や感覚のようなものが介在していることは確かである。しかし、それらを客観的に測定することは今の科学技術では難しく、レクティカの測定手法でもそれらを測定することはできない。

もちろん、アセスメントセンターなどを活用して、実際にどのような行動が取られているのかを分析することにも価値はあるが、同じ行動でもその行動を生み出す背後にある意味の差異、つまり行動を生み出すメンタルモデルの質的差異が存在していることを忘れてはならない。

© YOHEI KATO 2018

残念ながら、アセスメントセンターを含め、行動に着目する既存のアセスメント手法では、こうした行動の裏にある意味や行動を生み出すメンタルモデルの質的差異を評価することができないのだ。全てのアセスメント手法と同様に、レクティカのアセスメント手法も完全なものではなく、限界を持つのは確かである。

それは上記で指摘したように、暗黙知のようなものや直感的な感覚を測定することができないことに現れている。視力を測る目的があるのに、体重計に乗る人はいないように、私たちは何をどのような目的で測定するのかを明確にし、その目的に合致するアセスメント手法を適切に選び取るという慧眼が必要だろう。

そして願わくば、「アセスメントのためのアセスメント」で終わらせるのではなく、「育成のためのアセスメント」を常に念頭に置き、アセスメント結果をどのように学習や成長支援につなげていくのかを考えていく態度を持つ必要があるだろう。2017/8/6（日）

No.45: KODE Art Museum of Bergen

Because I had a sore throat, I wanted to sleep early last night. I recuperated my strength because of an enough rest, so I can start today energetically. Today, I would like to visit the KODE Art Museum of Bergen. Munch beckons me to his world, thus I will see his work today. His zeal for art and his soul to eternity are still alive at least within me. Sunday, 8/13/2017